

ルイジ・メイヤー画：エインズリー卿編『エジプトの光景』

Views in Egypt, from the original drawings in the possession of Sir Robert Ainslie, taken during his embassy to Constantinople, by Luigi Mayer. London, R.Bowyer. 1801. (K382.42-M)

図書館司書三課（課長補佐） 尾崎 恵子

19世紀ヨーロッパに空前のエジプトブームをもたらしたきっかけは、ナポレオンのエジプト遠征（1798～1799）であった。彼は、科学者や技術者を多数同行させ、それらの専門家たちにギザの大ピラミッドを計測、またエジプトの遺跡を詳細に調査、分析させた。この時の調査記録は全23巻にまとめられ、『エジプト誌』として1809年に刊行を開始、1828年に完結した。

本書もまたエジプトブームの成果であるが、『エジプト誌』よりも先駆けている。1780年代にコンスタンチノーブルの駐在大使を18年間務めていたイギリスのロバート・エインズリー卿（1730?～1812）のもとで編纂され、イタリア出身のルイジ・メイヤー（1755～1803）の描く当時のエジプトの遺跡、人物画48枚を挿入して、1801年にロンドンのポウィエー社から刊行^{（注1）}された詳細な現地報告書である。また、刻版はイギリスのトーマス・ミルトン（1743～1827）による。18世紀のエジプトはオスマン帝国の支配のもとにマムルーク（トルコ人、本来非黒人の奴隷兵）の将領たちが実権を握って闘争を続けていた時代であった。当時のエジプトはナポレオン軍の侵略・占領によりマムルーク軍が粉砕された時期で、このような時代的・政治的背景のもとで企画出版された。

今日からさかのぼること約200年前のエジプトの貴重な遺跡群、ナイル川に連なる諸都市の景観、建築、人々の情景などのほか、現在では大変珍しい貴重なベドウィン族、アラブ族長、エジプトの女性ダンサーのコスチュームなどが図版に活写されている。1842～1849年にデビッド・ロバーツ（1796～1864）の古代エジプトの考古学的遺跡すべてをスケッチした『エジプト・ヌビア誌』が出版されたが、本書はそれらに先立つこと3～40年

前に発表されたものである。

著者のルイジ・メイヤーはイタリアに生れ、風景・水彩・デッサン画家で、18世紀末イタリアで活躍した。1776～1792年にかけてロバート・エインズリー卿のために多くの絵画を制作した。18世紀後半のヨーロッパでは、オリエントに赴任した外交官らは画家を伴い、当時の珍しい風俗や服装を描かせて本国に情報として送るという社会的慣行があり、本書もそうした当時の時代を反映して制作された。

本書はアクアチント銅版画に手彩色が施された、図版中心の重量感ある縦49cm、横35cmの大型フォリオ判で、表紙は赤い皮装無地である。構成は前書き・序文等がなく、表題紙、扉に続く。扉にはロバート・エインズリー卿に対し、出版元



図1 エジプトの高官

のロバート・ボウィエ氏と版画家のトーマス・ミルトンから、図版掲載の許可のもとに一般大衆へ公開できることへの謝辞が述べられている。続いて古代や当時のエジプトについての解説が1ページから11ページまで、それ以後は48枚の図版および対応する解説がなされている。

図版は、「ナイルメーター（ナイル川増水測定用水位標）の光景」から始まり詳細な描写と説明文が続く。ギザの第一番目の大ピラミッド、その中の石棺のある会議室と美術館への通路、巨大なスフィンクスの頭、スフィンクス近くの墓室の入口、ギザのピラミッド近くの地下室、古代の玄武岩の石棺、アレクサンドリアの地下墓地の内部、アレクサンドリアのオベリスク、ポンペイウスの柱、クレオパトラの浴場、プトレマイオス図書館の遺跡、モスクとアレクサンドリアの未完遺跡、古代の外壁の景観とクレオパトラの針、アプキールの砦と港、ロッゼッタの街、アラビア人聖者の墓、モラッド高官の宮殿、カイロのモスクの400本の柱、モスク入口のボルピリオスのオベリスク、メナフの街、モラッド高官の邸宅の広場でマムルークの訓練、エジプト人の舞踏会、定期市、ナイルの渡

し舟、カイロの婦人、エジプトの農民と家族、エジプトの牧夫、エジプトの円花飾りの門等々多彩な風景画が描かれ、当時の風俗や服飾をもうかがい知ることができる。巻末には収録されている図版の目次一覧と解説ページが付記されている。

「エジプトの高官」（図1）はオレンジ色に彩色された布地の Kaouk（被り物）の周りをターバンで螺旋状に巻き、モスリンと金を振った紐で斜めに交差させている。カフタン（caftan）を着用し、外套（pelisse）は黒貂^{てん}、又はアミンの毛皮がついている。緋色で長袖の外衣、ベニシュ（benish）は6個の金の留め金で飾られ、インドの肩掛けをサッシュ（帯）に使用と記述されている。ヨーロッパとアジア・アフリカを結ぶ海路、陸路が交差するコンスタンチノーブルは通商のかなめであり、オスマン帝国の支配下にあったエジプトは服装や文化にも影響を受けた。

「エジプトの女性ダンサー」（図2）たちが公開の場所で着用する衣装は、エジプトの中流階級の女性が自宅（ハレム）で着用するものとはほぼ同じであった。幅の広い絹の帯には房飾りがあり、小さな銀貨で装飾され、さらに指輪、腕輪、ネックレスなど色々な装身具を用いている。顔、胸、手の甲などの小さな黒い模様はエジプト婦人中流・上流階級の一般慣習に従って、ヘンナ樹の葉で染めている。ヘンナ染めは通常赤であるが生石灰と煤を亜麻仁油で製した軟膏を塗ることによって黒に変色させた。ヘンナ染料は今日でも髪染めに用いられている。

アクアチント銅版画は16世紀から19世紀までアンティーク・プリントの歴史の中で最も長い間使われた。この腐蝕銅版画は繊細なグラデーションの表現を可能にした。水彩画に見られる薄い色合いの光の輝きや透明感を再現するため、18世紀後半から19世紀前半にかけてイギリスで大いに用いられた。本書の図版も柔らかで美しい水彩画風に表現されている。



図2 エジプトの女性ダンサー

注1 同じ出版社からフランス語版『Vues en Egypte d'apres les dessins originaux en la possession de sir Robert Ainslie』も1802年に刊行されている。